

## 編集後記

本誌を発行する全カリ運営センターは、今まさに大きな変化を経験しつつある。まず、全カリにとつての「教授会」であった、各学部選出委員の集まる運営委員会が2008年度末をもって廃止された。その役割の多くは全カリ運営センター委員会（実質的に部長会）に引き継がれた形になっているが、現実には、センター委員会の審議事項を管理するコア会議を構成する執行部の4人（全カリ部長、副部長、言語・総合のチームリーダー）の役割が増大した。さらに、総合では教育研究室がなくなり、それに換わるサポートグループが活動を始めた。2009年度はまた、このような組織面だけではなく、全学共通カリキュラムの大改定（言語は2010年度、総合は2012年度から新カリ実施）の構想をつめて実施に移していくという教育の中身にかかわる面でも、重大な変化（に向けての準備）の年である。これら全カリの新しい動きについては、『全カリニュースレター』26号（2009年10月）のコア会議メンバーの座談会「全カリの未来を語る」もぜひご覧いただきたい。

さて、『大学教育研究フォーラム』15号、すなわち本号の編集にあたっては、2010／12年度の新カリをことさらに表に出すことはしなかった。1996年の創刊以来、本誌は、全学共通カリキュラムにかかわるいろいろな活動を紹介することに力をいれてきたが、それにとどまらず、より一般的に大学教育の発展に資することをめざしてきた。本誌の誌名は、狭く立教大学の全カリに閉じてしまわない、そのような姿勢を表すものであろう。本号所載の「座談会 “今どき”の授業を考える」、「シンポジウム 学士課程の科学教育—全カリ理系教育の未来」、そして、いくつかの事例報告などは、仮に2010／12年度のカリキュラムの大改定という当面の課題がなかったとしても、大学教育にたずさわる私たちが日々考えるべき多くの問題を論じている。もちろん、「授業探訪 一言語副専攻（言語B）関連科目」のように、2010年度からの言語の新カリに直接かかわる記事も含まれている。また、座談会の参加者の沼澤秀雄・原田久、シンポジウム司会の上田恵介の各氏は、2012年度カリの策定にあたってきた総合のチームメンバーであり、その意味では、座談会やシンポジウムにも、どのような新カリを作り上げていくべきかというアクチュアルな問題意識を見ることができる。

最後に、本号のスペシャル企画、「モノローク」に触れておこう。「理想が現実と瞬間的に戯れる教育的美学の戯画的実践」は、2010年4月に総合チームリーダーに就任する平野隆文氏に、全カリをめぐる思いを自由に書いていただいたものである。当初は「エッセー」欄にということをお願いしていたものであるが、原稿をいただくと、これまでの本誌の「エッセー」の域を超えたその迫力に、掲載の可否を含めて編集部内で議論となった。結局、これからの全カリを考えていくうえでは、本音で議論することが必要である。次期チームリーダーの鋭い筆が描き出す像は、教職員の多くにとって必ずしも快いものではないかもしれないが、全カリを推進する側の人間も、きれいな言葉で飾りごまかすことなく、現実と厳しく向き合ふところから始めるべきであろうとの全カリ部長の言葉によって、「モノローク」という新しいジャンルでの掲載が決定された。ぜひお読みいただきたい。

青木 康（あおき やすし）

（本学文学部教授／

全学共通カリキュラム運営センター副部長）